

令和3年度 第3回 学校運営協議会

1 日 時 令和4年1月28日（金）午前9時30分から午前11時30分まで

2 場 所 静岡県立伊豆の国特別支援学校 会議室

3 参加者

○学校運営協議会委員

若林 高至 様 なのはな相談室 室長
山田 芳治 様 社会福祉法人春風会 障がい統括施設長
中村 裕子 様 伊豆の国市韮山地区 民生委員・児童委員 主任児童委員
東方 慶 様 三島市手をつなぐ育成会 理事
山元 薫 様 静岡大学 教育学部 特別支援教育 准教授
宇佐美 祐三様 伊豆の国特別支援学校 P T A会長

○教職員

校 長 早田 公子 副校長 廣瀬かよ子 教 頭 植松 隆洋
事務長 鈴木 健夫 小学部主事 渡邊 康子 中学部主事 水野 靖弘
高等部主事 伊賀 美紀 教務課長 岩谷 俊宏

4 内 容 【進行】山元コーディネーター 【記録】教務課長

(1)開会

(2)校長挨拶

(3)協議等

令和3年度学校経営の評価について

質疑応答

令和4年度学校経営の方針について

(4)閉会

5 議事録

【令和3年度経営の評価報告・令和4年度経営方針の説明においていただいた質問・意見等】

委員 ・保護者への参観の実施状況はどうなっているか。（教務より説明）

コロナ禍の中でも参観が十分にできていることが学校への安心感、評価につながっている。

委員 ・学校としての防災訓練はどうなっているか。（教頭より説明）

それぞれの災害にどのように対応していくか重要で「障害のある人の防災」という視点も大切である。場所や時間帯によって対応が変わってくるため、学校として検討しておく必要がある。

委員 ・地域との連携について、結びつきのきっかけ作りが難しい。

施設では、コロナ対策をしながら施設外就労と農家に出向き、作業をさせてもらっている。学校では思いつかない仕事、地域で困っていること等が出てくると思われるため、積極的に学校から地域へ発信をしていくとよい。

委員 ・ 人権意識の向上はよい、継続してほしい。
・ 新設校での大変さもある。がんばりすぎず、教職員も一人一人が尊重され、ゆとりをもって児童生徒に向き合える職場環境を作っていくことも必要である。

委員 ・ 地域との連携や交流、多角的な視点での模索が、保護者からの願いである。
・ 結果から、「継続する事」「改善点や課題を具体化する事」「新たな課題とする事」など取捨選択し、より効果的に運用していくとよいと思われる。

委員 ・ 「子どもたち自身が自らの身を守ること」は大事であり、是非身につけてほしい。
・ 伊豆の国書式個別の保護者との共有は、面談で補足をするるとよい。またサービスを利用している方も多く、事業所との連携や情報共有がより大切になる。

委員 ・ がんばっている学校である。専門性・授業の変化など、先生方の成長も大きい。外部からの評価等で、成長を実感できるとよい。
・ 安全安心に関して、中学部の防災教育についても生徒が主体的に防災教育に取り組む点を評価できる。
・ 個別の教育支援計画・指導計画については、教員と保護者とのずれもある。個別の教育支援計画・指導計画の意味、カリキュラムの意味、何ができ次に何を目指すのか、教員が保護者に説明できるとよい。活用としては、カリキュラムにしっかりと位置付けることが大切である。
・ 連携が課題である。
キーワードを「つなぐ つながる（その次にひらく）」、その中に①学びとしてのつながり・②地域とのつながり・③人生につながっていくキャリア教育が入るとよいのではないかと。R3年度を土台として、R4年度から1つのプロジェクトにし、R5年度に「ひらく」へつながっていく。

委員 ・ 家庭環境の複雑さから、愛着に関する行動、育てにくさ等の課題が見られる家庭もある。保護者への子供理解の啓発の学習会、家庭へのアプローチが必要である。

委員 ・ 全国的に、特別支援学校に軽度の知的障害の児童生徒が増えている傾向がある。より一層子供理解がより大事である。

委員 ・ 自立支援協議会の中でも包括的支援の重要さが言われている。

校長 ・ いただいたご意見を大切に、令和4年度を作っていく。
開校2年目は、1年目いなかった子どもたち、保護者、教員が仲間入りするので考えの共有が大切である。入ってくる方たちが、疎外感を感じることないようにチームとして、引き続き取り組んでいきたい。